

## 世界の若者は、いま、平和をどう見ているか。

An Editorial Reading of 16,439 Voices —  
4年間の平和意識調査が示した、揺らぎと、行動の兆し。

16,439件

回答数 / Total Voices

173カ国・地域

Countries & Territories

4年間

継続調査 / Longitudinal

85%

13~22歳 / Aged 13-22

### 01 — SURVEY OVERVIEW

## 4年分の声を、ひとつの軌跡として読み直す。

公益財団法人 五井平和財団では、「平和の創造」を目的とした様々な活動の一環として、平和に資する青少年教育事業を展開してきました。世界規模で、20年以上にわたって毎年実施してきた国際ユース作文コンテストの参加者の多様性に着目し、世界の若者たちの平和についての現状認識や問題意識、平和に貢献するために取り組みたいことなどをアンケート形式で聞き取り、そのデータから今の若者たちの意識の傾向を探ってきました。

本レポートは、2021年から2024年までの4年間にわたるアンケート調査の結果を統合的に分析したものです。4年間で延べ**16,439件**の回答が世界**173カ国・地域**から寄せられました。単年では見えにくかった若者意識の変化を、年次比較・地域比較・主要設問の交差分析を通じて読み解いていきます。

### 調査と分析の概要

- 4年分の回答データを統合（2021: 6,538件 / 2022: 4,272件 / 2023: 3,610件 / 2024: 2,019件）
- 複数選択質問（Q6・Q7・Q11・Q12）は選択肢を年次で正規化し、各選択率を算定
- カテゴリ変数（Q3・Q5・Q10など）の年次差はカイ二乗検定、Q4平和度スコアはANOVA（一元配置分散分析）で検証
- Q10（対話頻度）とQ11（行動数）の関連はスピアマン順位相関で検証
- 回答者の出身国を6地域（アジア / アフリカ / 欧州 / 米州 / 中東 / オセアニア）に分類し、99.6%を地域単位で分析

# 76%

## 女性回答者の比率

4年通じて女性回答が多数を占める (n=11,451)。男性 4,827、その他 161。

# 18歳

## 回答者の中央値年齢

主に 13-22 歳のユース層。Youth 13,987 / Children 2,452 と Z 世代の声が中核。

# 8,876

## アジアからの回答

インド・フィリピン・パキスタン・日本ほか。次いでアメリカ 3,416、米州 2,517。グローバルサウスの声が極めて厚い。

# 12問

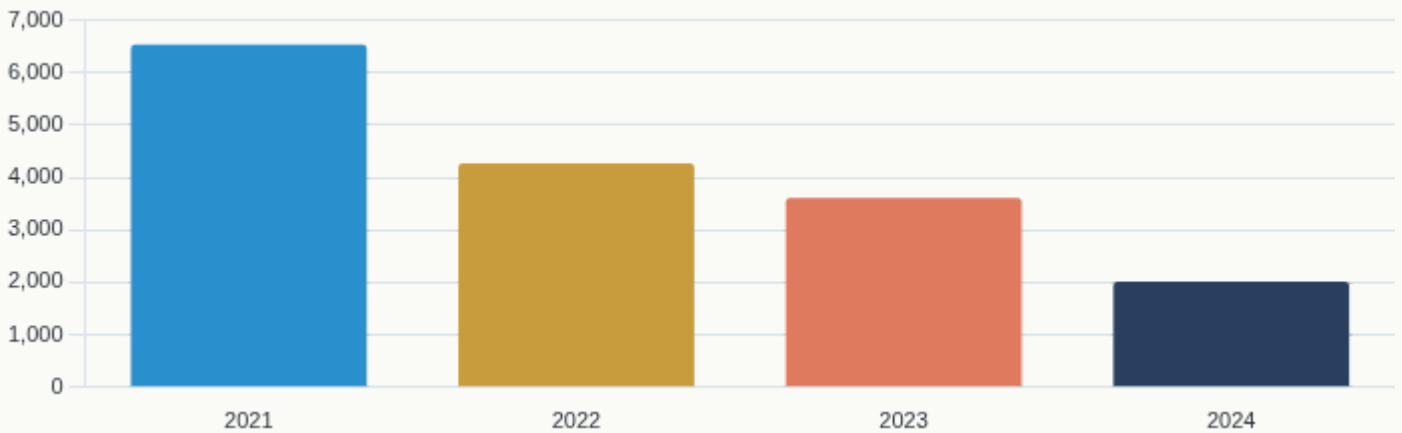
## 分析対象の主要設問

Q1~Q12 まで全質問を年次・地域・属性別に集計。複数選択の正準化により純粋な年次比較を実現。

### 回答者数の推移と地域構成

2021 - 2024

N = 16,439



回答数は年々減少しているが、地域構成はアジア優勢で安定。これは時系列比較における「同質的サンプル」を担保し、年次変動が **世界情勢に対する若者の認識変化** を反映していると解釈できる根拠となる。

## 02 - WORLDVIEW SHIFT

# 世界は less peaceful へ。 4年で深まった、認識の翳り。

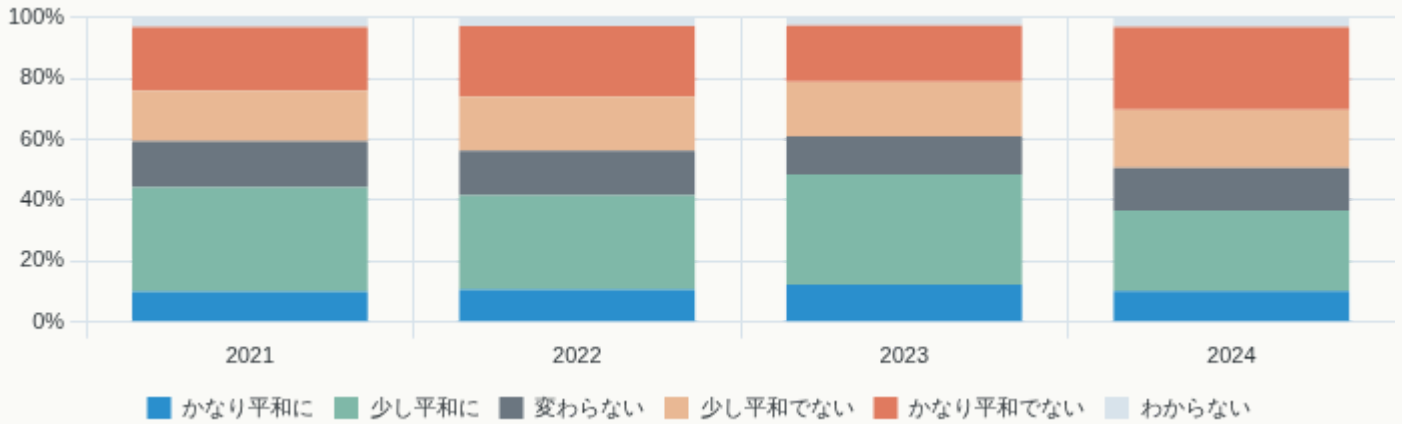
Q3「世界は過去より平和になっていますか?」では、「より平和」と答えた割合は2021年 44.3% から2024年 36.6% へ減少 (-7.7pt)。一方「より平和でない」は 37.3% → 46.0% へ増加 (+8.7pt)。同時に Q5「あなたが生きている間に世界は完全に平和になるか?」で「Yes」と答えた割合も2023年に一度 34.8% まで上昇したのち、2024年には 24.6% へ急落した。

カイニ乗検定では Q3 ( $\chi^2 = 132.2, p < 10^{-20}$ )、Q5 ( $\chi^2 = 172.1, p < 10^{-33}$ ) ともに **極めて高い統計的有意性**。背景にはコロナ・ウクライナ・中東情勢など、若者が日々目にする世界の緊張が反映されていると考えられる。

### Q3 — 世界は過去より平和になっているか

4 CATEGORIES AGGREGATED

$P < 10^{-20}$

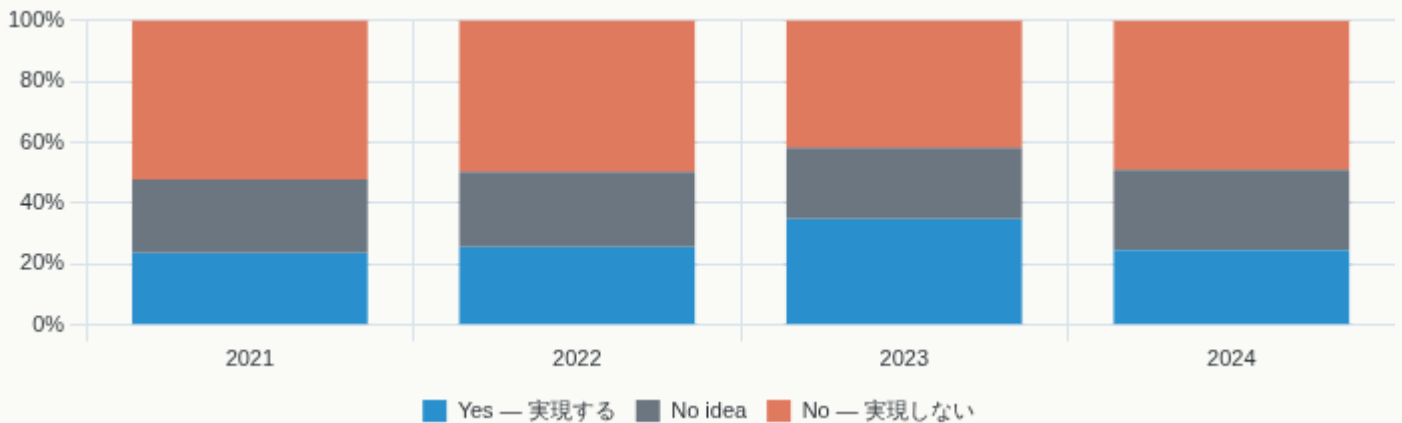


「より平和でない」(濃赤系)が4年通じて増加。2024年は「Much less peaceful」が27.0%と過去最高。

### Q5 — 生きている間に完全な平和は実現するか

YES / NO / NO IDEA

$P < 10^{-33}$



2023年の希望のピーク (Yes 34.8%) から2024年に急落 (24.6%)。世界情勢への失望が若者の長期的展望を揺るがしている。

## — INSIGHT 01

若者が肌で感じる世界は、4年間で **確実に「平和から遠ざかっている」**。

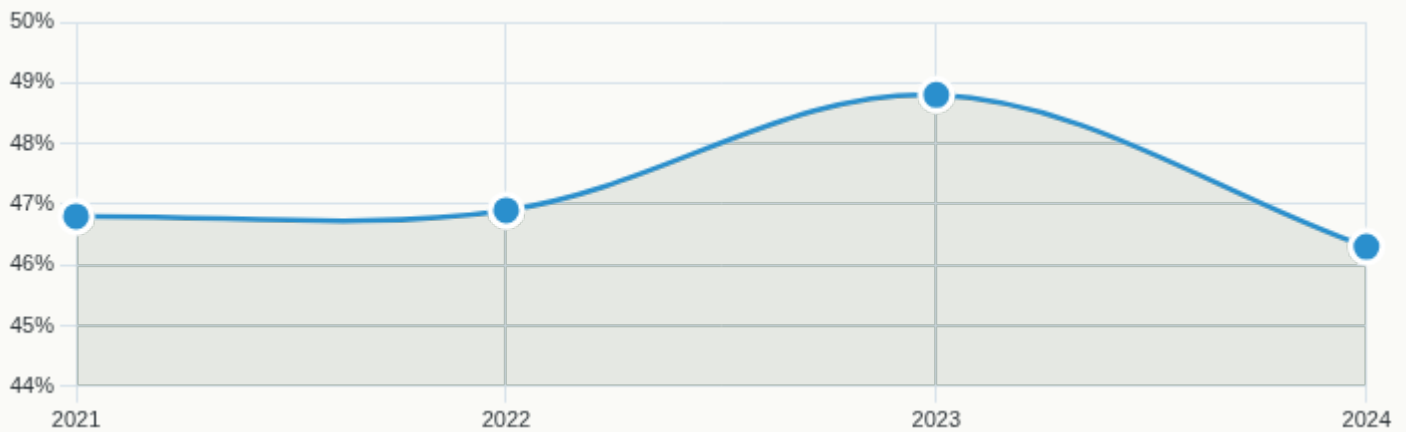
この感覚低下は統計的にも明白であり ( $p < 10^{-20}$ )、若者に学び・対話・行動の機会を届けることの大切さを、改めて浮かびあがらせる結果といえる。

Q3 + Q5 / 2021-2024 / n = 16,439

Q4 — 世界の平和度スコア (0-100%)

MEAN ± SEM

ANOVA F=11.78, P < 10<sup>-6</sup>



2023年に若干上昇したのち、2024年に最低水準(46.3%)へ。年次差は分散分析で有意。

## 03 — WHAT MATTERS MOST

### 「戦争を止めること」が **最重要課題**として急上昇。

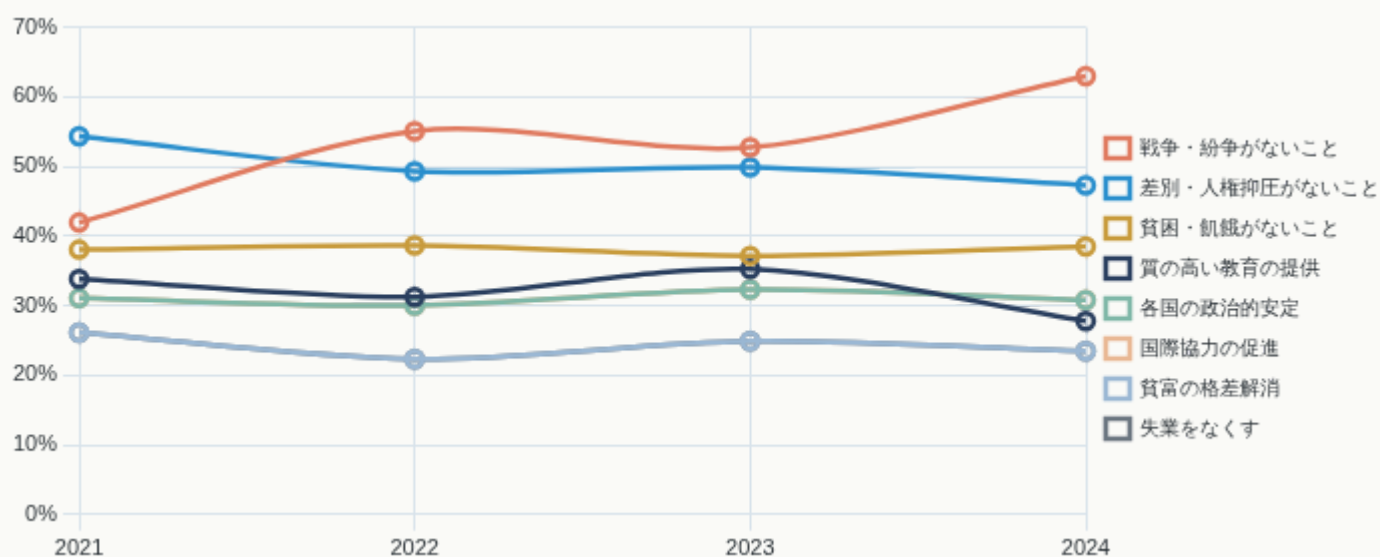
Q7「世界平和実現のために最も重要な課題は?」(複数選択)の回答を年次で追うと、最大の変化は「No wars or conflicts (戦争・紛争がないこと)」が **2021年 41.9% から 2024年 63.0% へ +21.1pt 急上昇**した。  $\chi^2 = 360.8$  ( $p < 10^{-77}$ ) という、本調査で最も劇的な変動だ。

一方 Q6「過去より改善されたと感じるもの」で「Fewer wars and conflicts (戦争・紛争の減少)」を挙げる回答は **37.1% → 21.9% へ -15.2pt 急減**。つまり若者の認識は「戦争はむしろ増えている。だから止めるべき」という方向へ大きくシフトした。

Q7 — 世界平和に最も重要な課題 (上位 8 項目, % 選択率)

MULTI-SELECT, TOP ITEMS

4-YEAR TREND

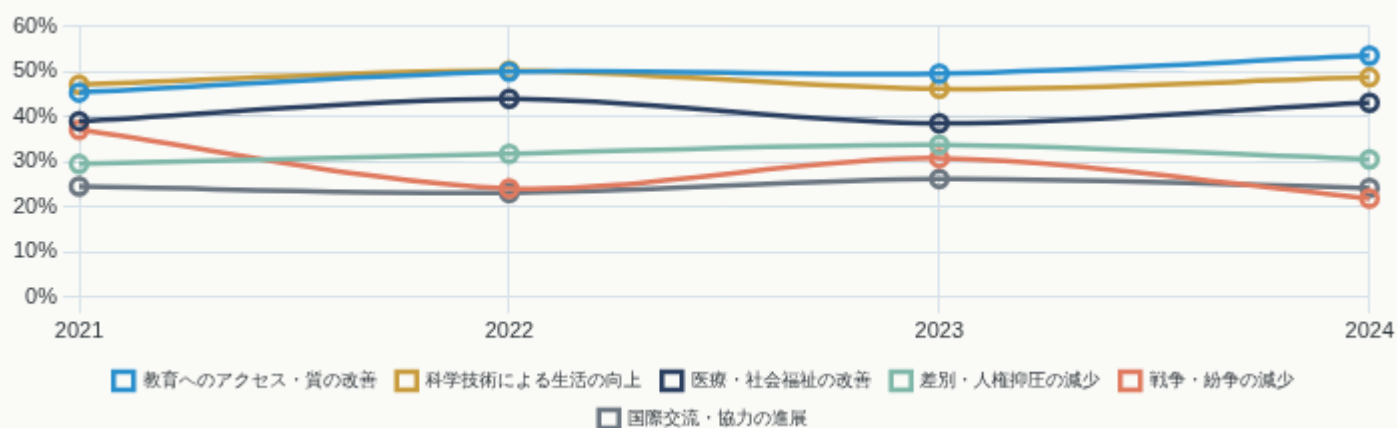


「戦争・紛争停止」が他の課題を引き離して最重要となる。一方「教育」「貧困」「差別」も常に Top5 に。差別 (人権) は 4 年通じて 47-54% と安定的に高位。

Q6 — 改善されたと感じる事象 (Top 6 推移)

MULTI-SELECT

2021 → 2024

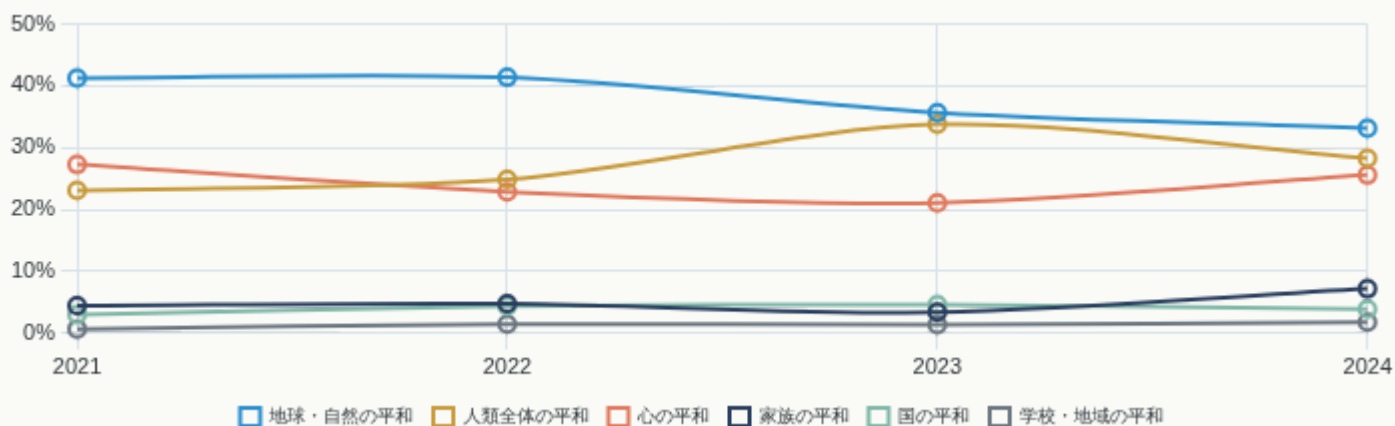


「教育へのアクセス」「科学技術による生活向上」は楽観が継続。一方「戦争の減少」は急速に色あせている。

## Q2 - 最も大切にしたい平和の種類

SINGLE SELECT

2021 → 2024



「Peace among all of humanity (人類全体の平和)」が 23.1% → 28.3% (2024) へ。グローバル連帯への意識が強まっている。

### — INSIGHT 02

若者の優先順位は明確に変わった —

「戦争を止めること」が **+21pt 上昇**。これは過去 4 年で最大の変動であり、財団のミッション「平和」を世界に訴求する **絶好のタイミング**であることを示す。

Q7 / 2021: 41.9% → 2024: 63.0% /  $\chi^2 = 360.8, p < 10^{-77}$

## 04 — DIALOGUE & ACTION

### 対話する若者ほど、動いている。

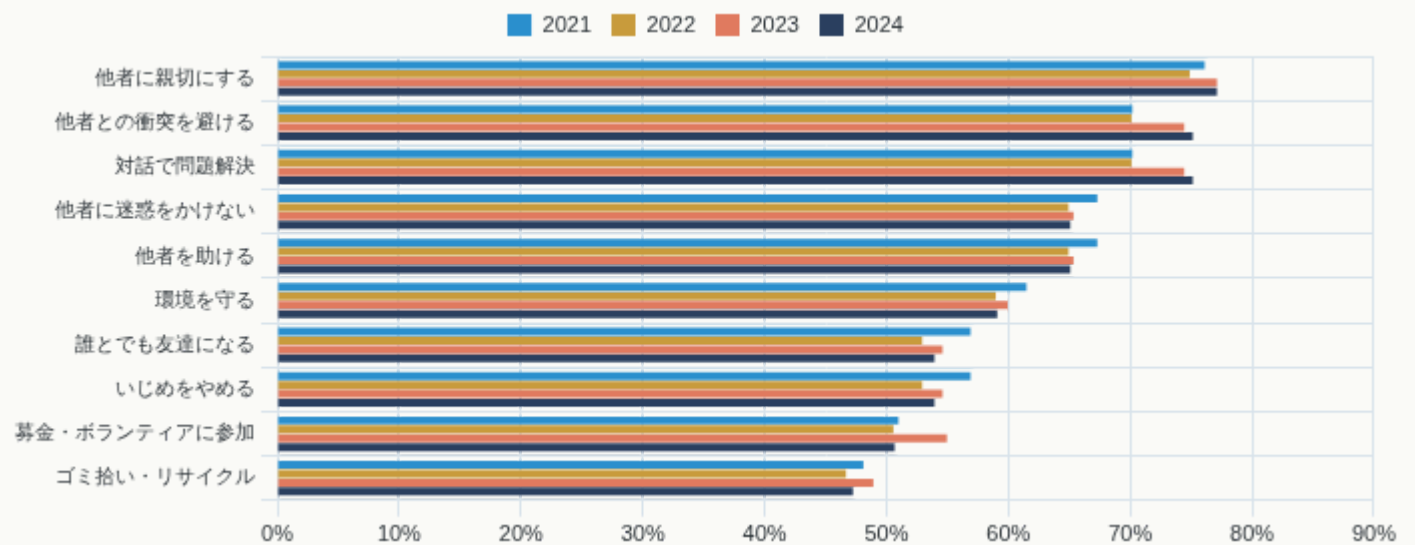
Q11 「平和のために何をしているか/したいか」では、**78%**が「他者への親切」、**72%**が「対話による問題解決」を選択。これらは年次変動が小さく、若者が共有する**普遍的な平和観の基盤**と言える。

特筆すべきは「**自分自身で平和プロジェクトを立ち上げる**」意欲の伸び。2021年 33.6% → 2024年 39.0% へ +5.4pt 増加 ( $\chi^2 = 50.6, p < 10^{-10}$ )。「平和運動への参加」も 42.1% → 46.8% へ +4.7pt 増加。**受動から能動**への若者意識のシフトが統計的に確認できる。

Q11 — 平和のための行動 (年次推移, 主要項目)

MULTI-SELECT

N = 16,439

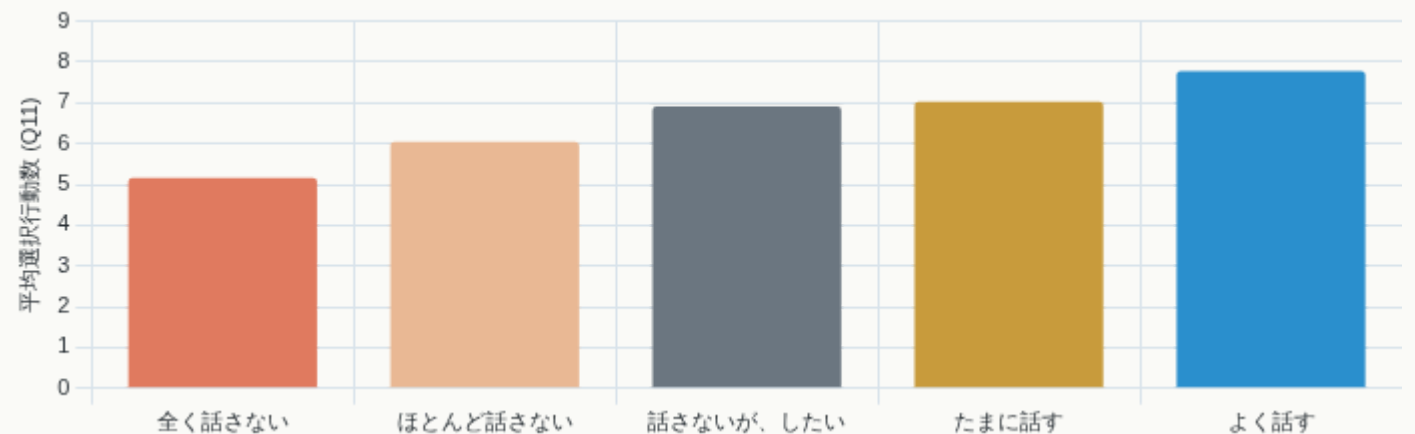


親切・対話・環境保護といった「日常実践型」が最大層。プロジェクト起業・運動参加といった「能動型」が増加傾向。

対話頻度 (Q10) と 平和行動数 (Q11) の関係

MEAN # OF ACTIONS PER DISCUSSION FREQUENCY

SPEARMAN R = 0.135, P < 10<sup>-67</sup>



毎日のように平和を話す若者は平均 7.78 種類の行動を取り、ほとんど話さない若者は 5.16 種類。差は約 1.5 倍。話すこと自体が、行動への扉を開く。

## — INSIGHT 03

平和は「教える」ものではなく、「話させる」もの。

日常的に平和を話題にする若者は、そうでない若者より1.5倍多くの平和行動を取っている。  
対話の機会を提供することが、若者の行動を生み出すうえで大きな意味を持っている。

Q10 × Q11 / 4-year combined / Spearman  $r = 0.135$ ,  $p < 10^{-67}$

## 05 — WHAT THEY NEED

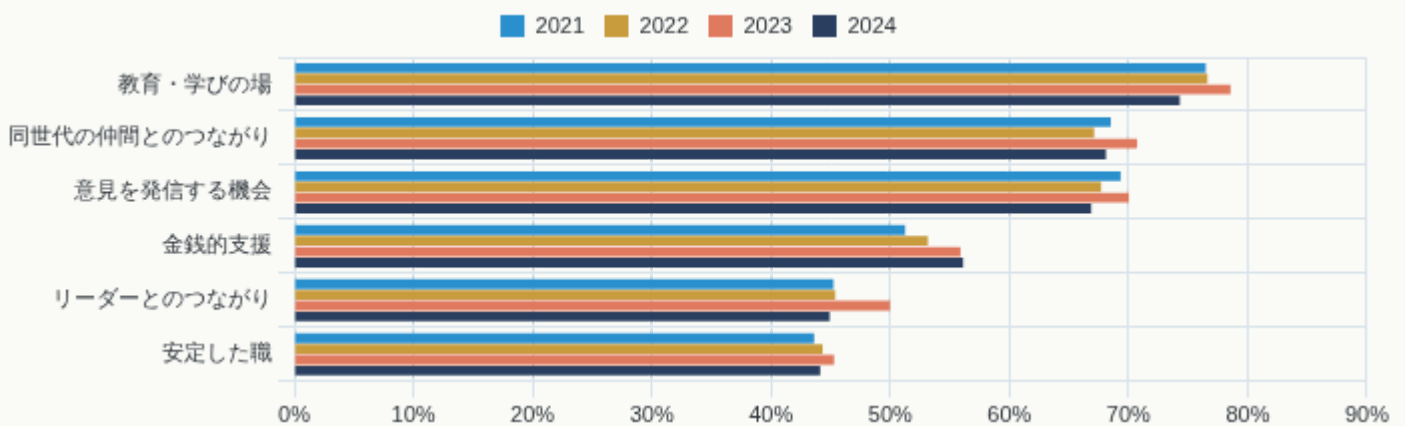
### 若者が求めているのは3つの資源。

Q12「平和に貢献するために何が必要か?」では4年通じて Top3 が変動なく明確だ。

Q12 — 平和に貢献するために必要なもの (% 選択率)

MULTI-SELECT

2021 → 2024



教育・対話の場 (76%) → 仲間とのつながり (69%) → 発信機会 (68%) の順。金銭的支援 (54%) より、**非金銭的・関係性資本** が圧倒的に求められている。

# 76.5%

## 教育・学びの場

4年連続で最大ニーズ。学ぶ機会が「平和への貢献」の前提条件と認識されている。

# 68.6%

## 同世代の仲間とのつながり

同じ志をもつピアコミュニティ。リーダーとの繋がり(46.4%)より高位。

# 68.5%

## 意見を発信する機会

声を上げ、聞かれる場。これが自己効力感と行動意欲を生む。

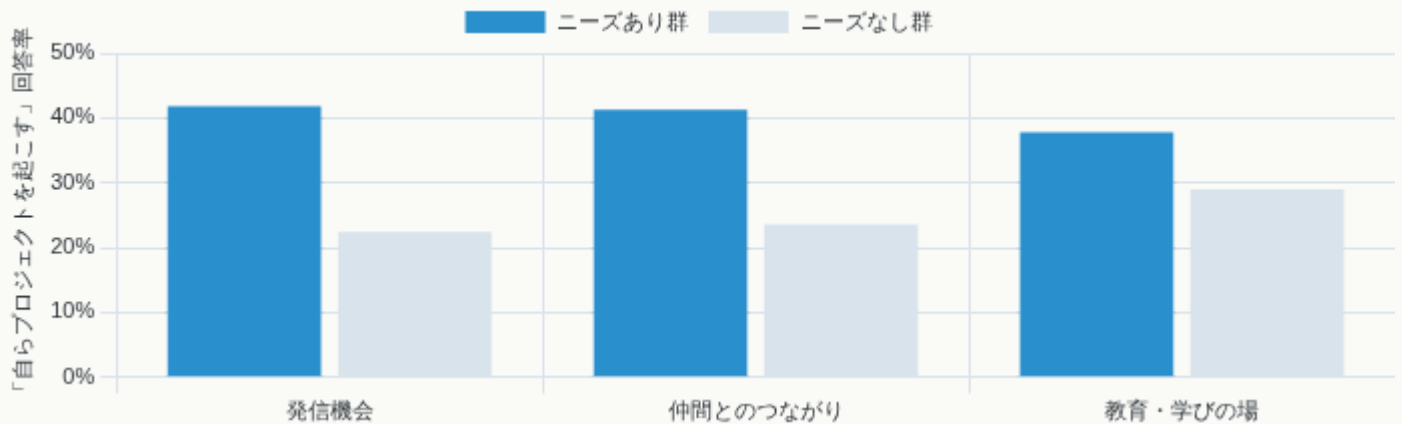
### 「ニーズ」と「行動」の連鎖 — どの支援が最も行動を生むか？

Q12で各支援を「必要」と回答した若者と、そうでない若者のQ11「自分でプロジェクトを起こす」選択率を比較した。何が若者の行動を後押ししているのかが見えてくる。

支援ニーズ別 — 「自分でプロジェクトを起こす」割合

Q12 SELECTED VS NOT SELECTED

$\chi^2$  TEST, ALL P <  $10^{-22}$



発信機会が必要と答えた若者の**41.8%**が自分でプロジェクトを起こす意欲を表明(必要としない群は22.4%)。仲間とのつながりも同様に**+17.7pt**の差。これらは行動を生む「最強のレバレッジポイント」。

## — INSIGHT 04

若者が一番欲しいのはお金ではなく「学ぶ場・つながる仲間・発信する機会」。

とりわけ 発信機会と仲間は、平和プロジェクトを「自分で起こす」確率を約 1.85 倍に押し上げる。財団が提供しているエッセイコンテストと受賞者ネットワークは、この最重要ニーズに正面から応える設計になっている。

Q12 × Q11 / Voice: 22.4% → 41.8%, Peers: 23.6% → 41.3%

## 06 — REGIONAL VOICES

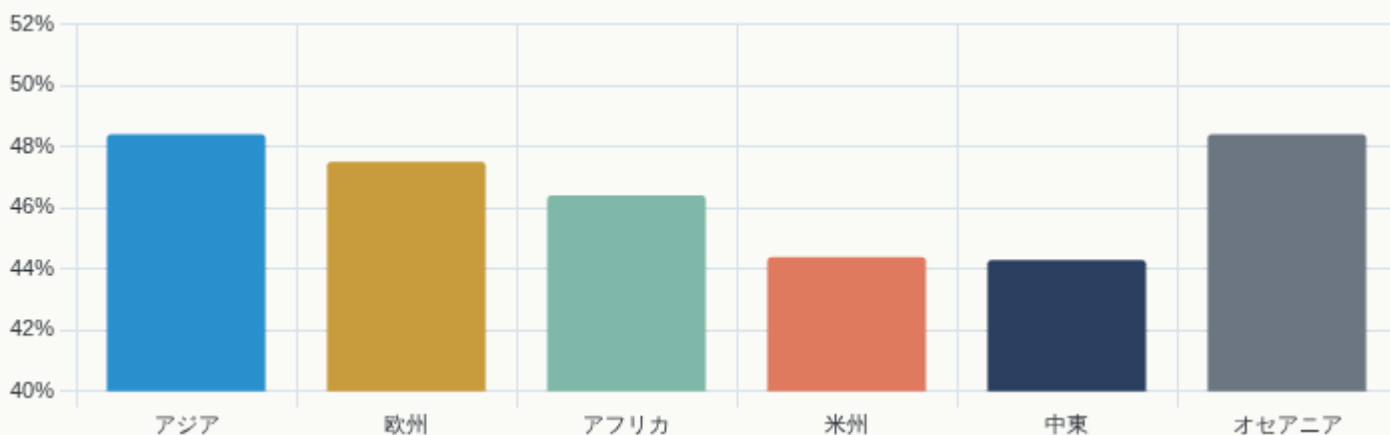
### 地域ごとに、違う「平和」の形がある。

Q4 平和度スコアと Q3 「世界はより平和でない」の地域別分析から、若者の世界観には地域固有の濃淡があることが分かる。アフリカや中東の若者は世界を「より平和でない」と感じる比率が高く、米州の若者は比較的楽観的だ。

地域別 — Q4 平和度スコア (4 年平均)

MEAN SCORE (0-100%)

N BY REGION NOTED

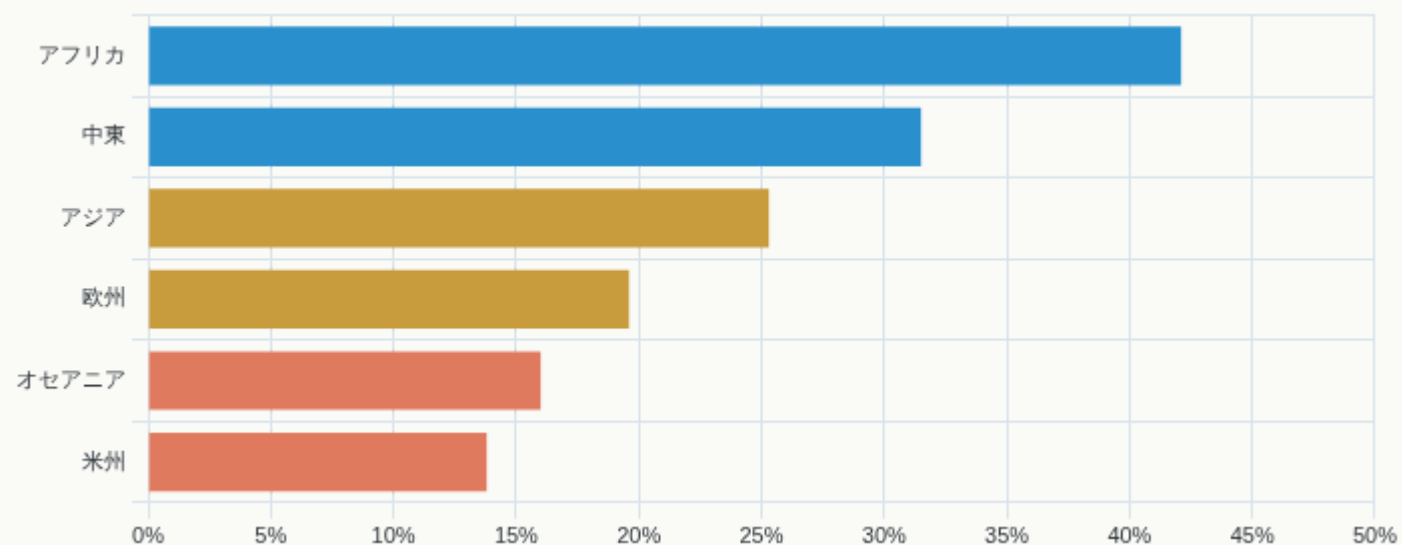


中東 (44.3%) と米州 (44.4%) が最も低スコア。アジア・欧州 (48%台) が高め。

地域別 — Q5 「生涯で完全な平和は実現する」 (Yes %)

% ANSWERING YES

4-YEAR COMBINED

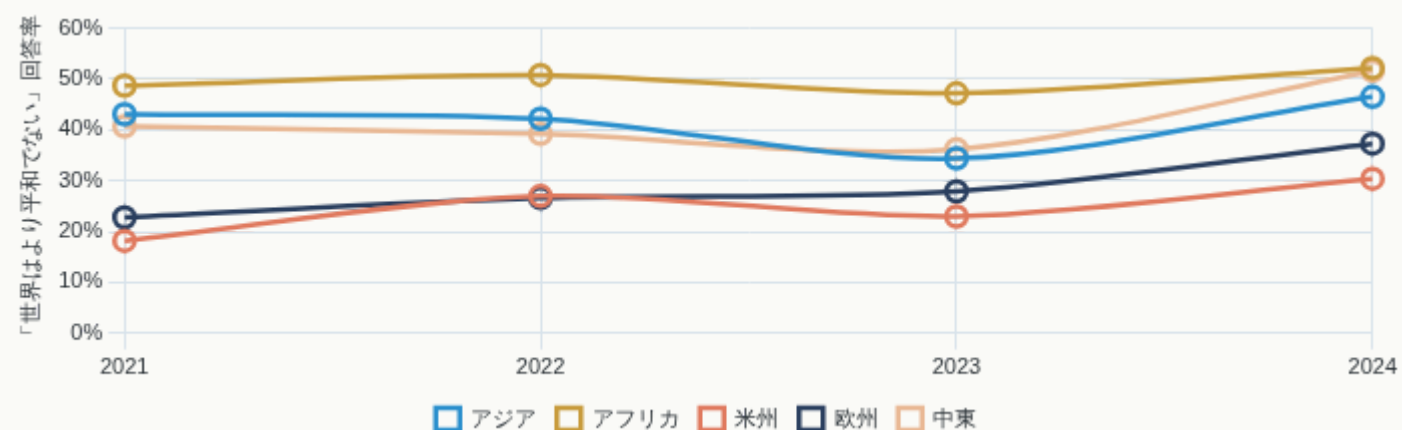


アフリカの若者は42.1%がYesと答え、最も楽観的。米州(13.8%)・オセアニア(16.0%)は最も悲観的。逆説的だが、紛争・貧困を身近に経験する地域ほど未来への希望が強い。

「世界はより平和でない」と感じる若者の割合 — 地域 × 年

Q3 NEGATIVE RESPONSE %

2021 → 2024

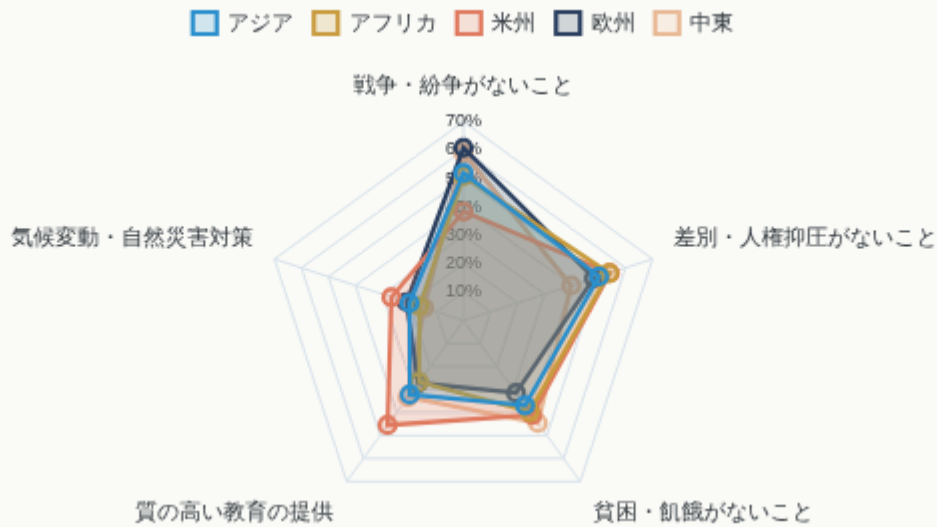


2024年は全地域で悲観が増加。特に欧州(22.8% → 37.3%)と中東(40.7% → 51.6%)の上昇が顕著。世界共通の認識劣化が進行している。

## 地域別 — 最重要課題 (Q7 上位 5 項目)

% SELECTING EACH, BY REGION

4-YEAR COMBINED



欧州・中東は「戦争停止」が最優先 (60% 超)。米州は「教育」が最重要 (45.5%) と独自。アフリカは「人権・差別解消」(54.0%) を最優先。地域ごとに異なる課題意識が浮かびあがる結果となっている。

## 07 — JAPAN IN FOCUS

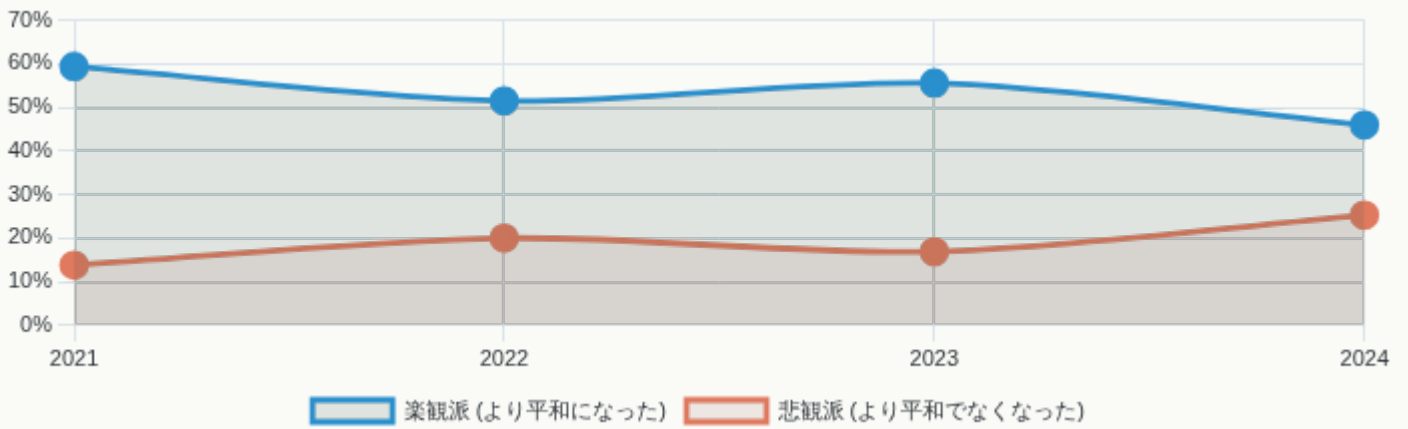
### 日本の若者は楽観的。 でも「平和は来ない」と考えている。

4年間で803名の日本人若者が回答。「世界は過去より平和になった」と考える楽観派は2024年でも46.0%と世界平均36.6%より+9.4pt高い。一方、「自分が生きているうちに完全な平和は来る」と思う若者はわずか9.2%で、世界平均24.6%の3分の1以下。この「現状は楽観/未来は悲観」という日本独特の逆説的構造が、4年間のデータに一貫して現れている。

### 日本の若者 — 楽観派 vs 悲観派の推移 (Q3)

2021 → 2024

N = 803 (4-YEAR)

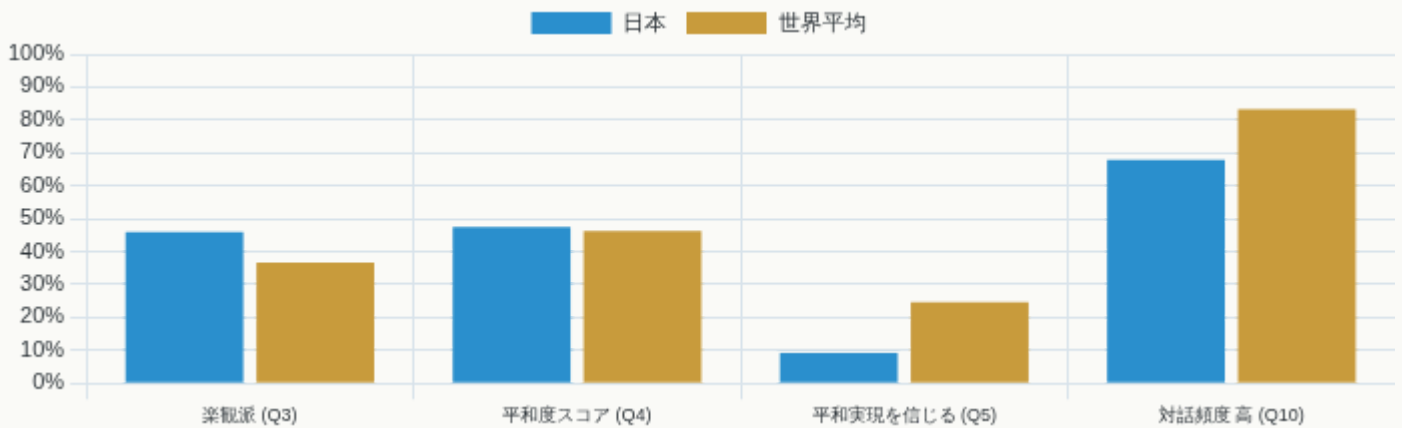


楽観派は 59.4% → 46.0% へ **-13.4pt**、悲観派は 13.8% → 25.3% へ **+11.5pt**。日本でも 4 年で確実に世界観が翳っているが、依然として世界平均より楽観的な水準を保つ。

### 日本 vs 世界 — 2024 年の主要指標

4 INDICATORS COMPARED

JP N=87 / GLOBAL N=2,019

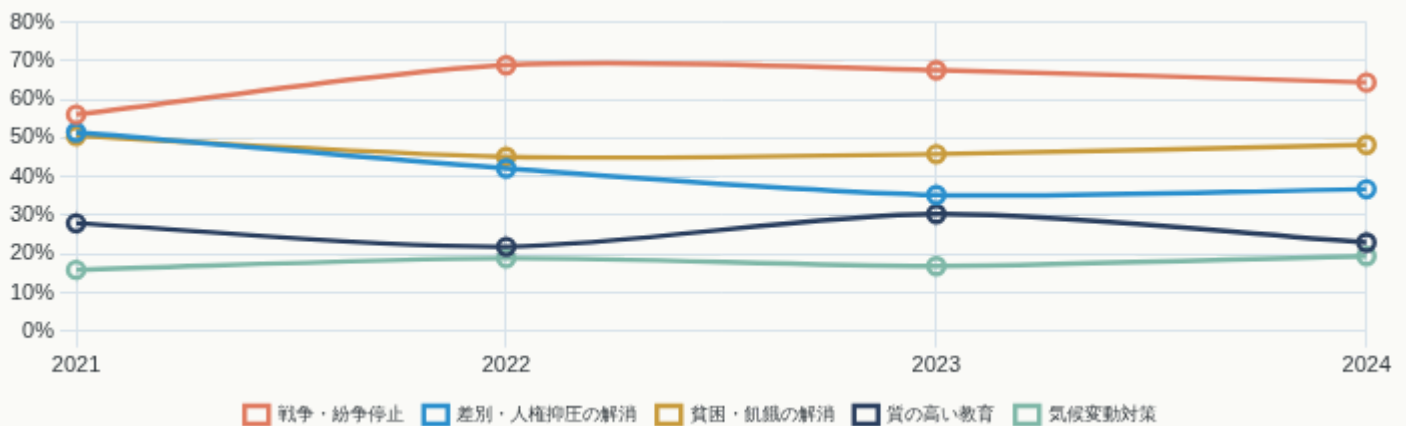


楽観・対話 (Q10) は世界より低めだが、未来希望 (Q5 Yes) は **世界平均の 1/3 以下**。これは日本特有の「達観・あきらめ」傾向と解釈できる。

## 日本の若者が考える「最重要課題」(Q7 上位 5)

MULTI-SELECT, 4-YEAR AVERAGE

VS GLOBAL COMPARISON



日本の若者は「貧困・飢餓」を世界平均より高く挙げる傾向があり、「気候変動」関心は世界より低い。「戦争・紛争停止」は4年通じて高位で、とくに2022年以降67-68%で推移。

### — INSIGHT 05 / 日本の若者から見えること

日本の若者の「平和実現を信じる」率はわずか9.2%(世界平均24.6%の3分の1以下)。**未来への希望が見出しにくい状況**が、日本の若者をめぐる大きな特徴として浮かびあがる。希望を取り戻し、自分にも何かができるという感覚を育てる学びの場が、いま日本で必要とされている、とこのデータは語っている。

Q5 / 2024 Japan vs Global / N=87 vs 2,019

## 08 — YOUTH VS CHILDREN

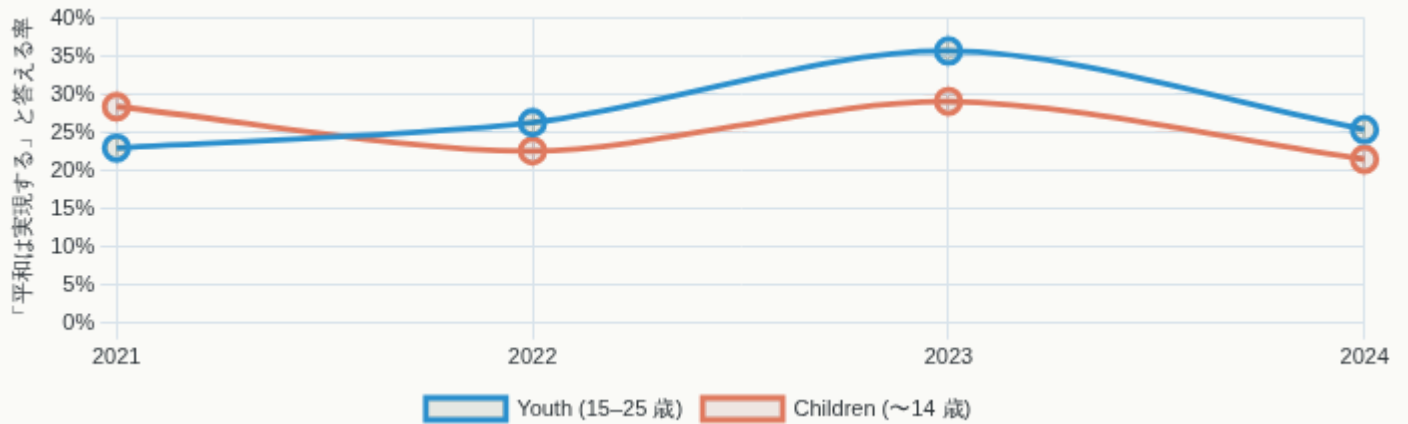
### 2024年、子どもの方が悲観的になった。 過去3年とは逆転。

回答者はYouth (15-25歳)とChildren (~14歳)に分類されている。2021-2023年は**子どもの方が将来を信じる傾向**がありました(「平和は実現する」と答える率がYouthより高い)。ところが2024年に逆転 — ChildrenのQ5 Yesは21.5%へ低下、「世界はより平和でなくなった」と感じる率は**53.1%**とYouth (44.3%)より高くなりました。

「自分が生きている間に完全な平和は実現する」Yes 率 — 世代別年次推移

Q5 BY CATEGORY × YEAR

YOUTH N=13,987 / CHILDREN N=2,452

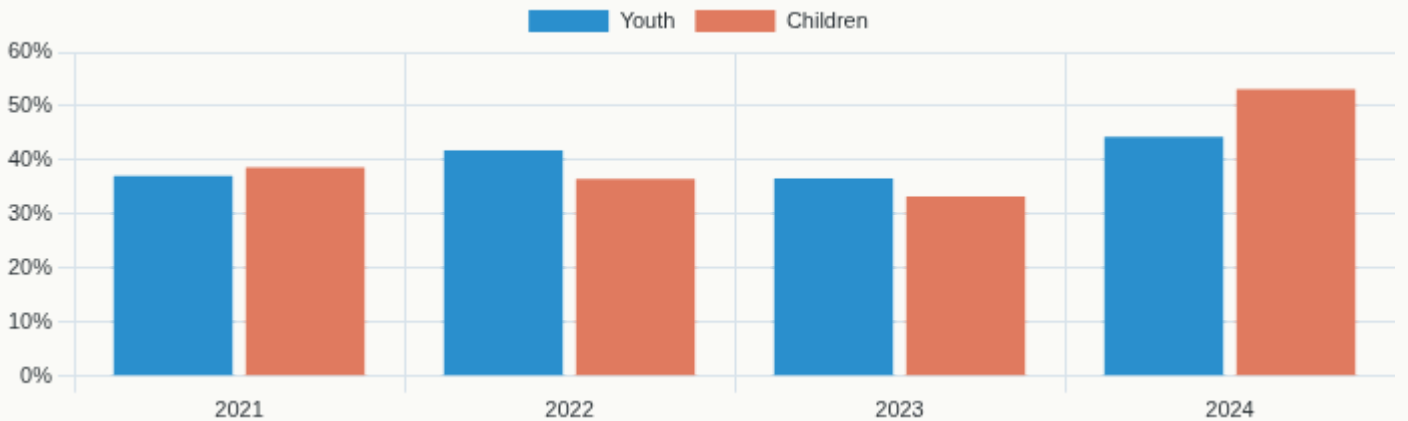


2023年にYouthは35.7%で過去最高だったが、2024年に25.4%へ急落。Childrenは4年通じて21-29%の低位レンジで推移し、**2024年はYouthとほぼ同水準へ落ち込んだ。**

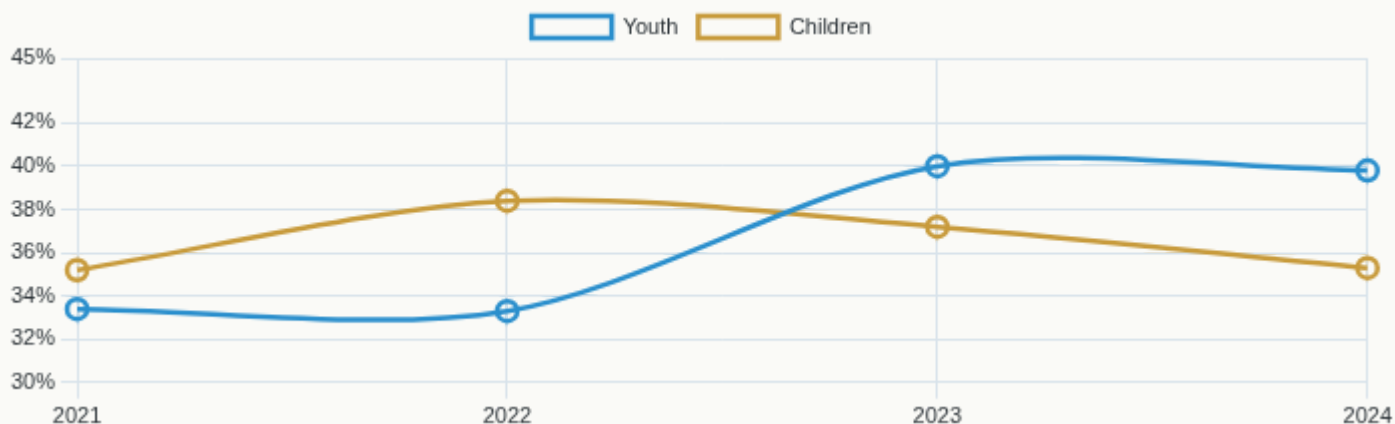
「世界はより平和でなくなった」と感じる率 — 世代別

Q3 NEGATIVE RESPONSE

2021 → 2024



2024年は**Childrenが53.1%**、Youth(44.3%)を8.8pt上回る。**子どもの方が世界の翳りに敏感**になっている初の年。



Youth はほぼ単調増加 (33.4 → 39.8%)。Children も 35–38% の水準で能動性は高い。子どもにも「動きたい」という意欲は確かに存在する。

## — INSIGHT 06 / 世代の変化

2024 年、世界の騒ぎは **初めて子どもの目にも届いた**。「子どもは未来を信じる」という前提が崩れたいま、児童期からの平和教育・希望のメンテナンスがこれまで以上に切実な課題として浮上している。

Q3 / Q5 / 2024 / Children N=382

## 09 — PESSIMISTIC, BUT ENGAGED

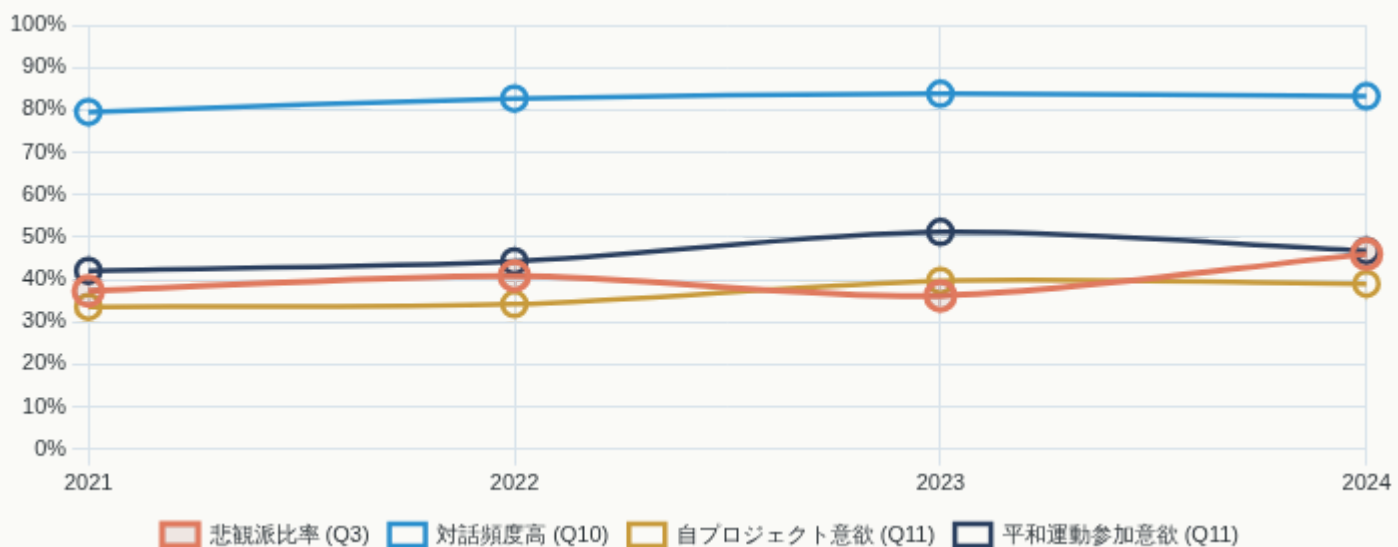
### 悲観しているのは、 動こうとしているから。

2024 年、「世界は以前より平和でなくなった」と答えた若者は **46.0%**。4 年で初めて悲観派が楽観派 (36.6%) を上回った。— ここで重要なのは「**では彼らは諦めたのか?**」という問い。データの答えは **明確に「ノー」**です。同じ 4 年間で、平和について話す頻度は上昇 (79.5% → 83.2%)、自分でプロジェクトを起こす意欲も上昇 (33.6% → 39.0%)、平和運動への参加意欲も上昇 (42.1% → 46.8%)。 **悲観の深まりと行動意欲の高まりが、同時に進行している**。

悲観の深化と、行動の高まり — 同時進行する2つの曲線

Q3 PESSIMIST % VS Q10/Q11 ENGAGEMENT %

2021 → 2024

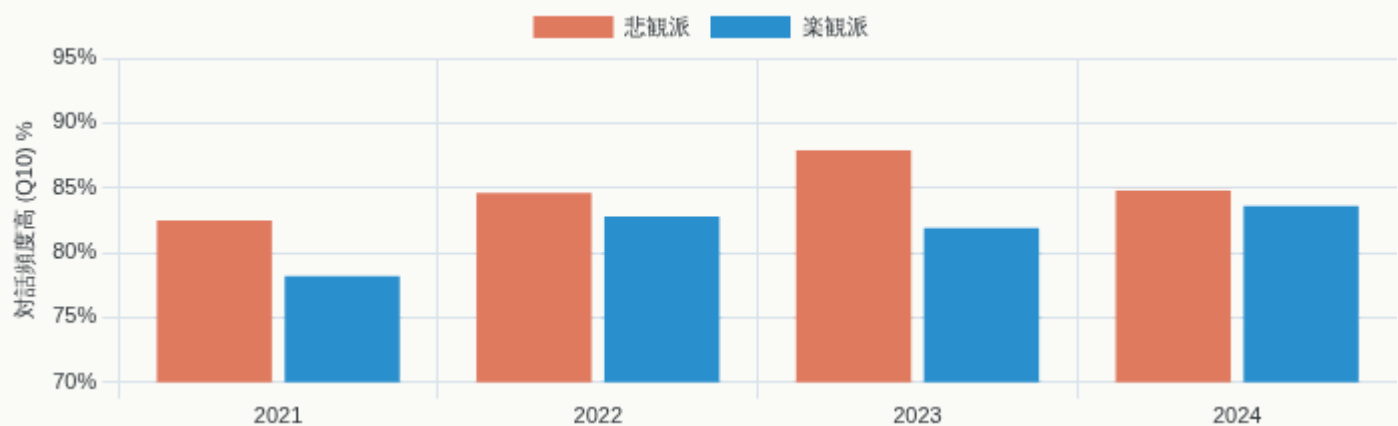


悲観派比率(濃赤)と、対話頻度高(緑)・自プロジェクト意欲(金)・平和運動参加意欲(紺)が同方向に上昇している。これは、「悲観 = 無関心化」ではなく、「悲観 = 危機感による行動の動員」と読み解ける現象。

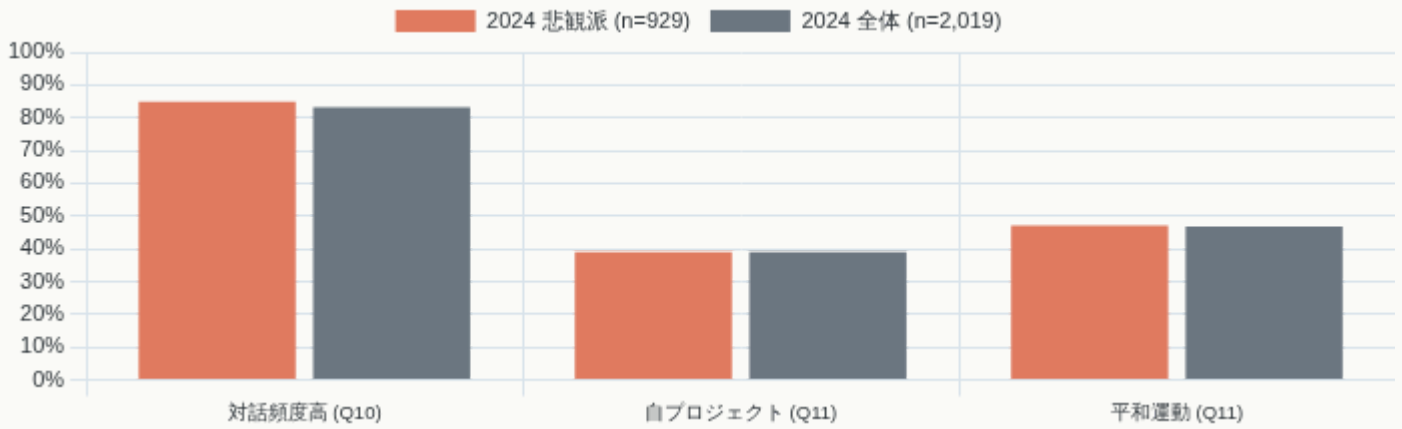
対話頻度 — 悲観派 vs 楽観派

Q10 HIGH FREQUENCY, BY Q3 VIEW

$X^2 P < 10^{-8}$



4年通算で、悲観派の方が楽観派より対話頻度が高い (84.5% vs 80.8%)。世界の驕りに気づいた若者ほど、平和を話している。



2024年悲観派は84.8%が平和を頻繁に話し、47.1%が平和運動に参加意欲、39.1%が自分でプロジェクトを起こす意欲を表明。全体平均と同等以上の関与度。

### — INSIGHT 07 / 悲観の先にある行動

若者が悲観しているのは、諦めたからではなく気づいたから。そして気づいた若者ほど、対話し、行動しようとしている。これは、平和教育や若者支援にとって最も希望ある発見のひとつです。危機感を絶望ではなく行動へのエネルギーに変えていく場づくりが、これからの時代にますます大切になっていくことを、このデータは示唆している。

Q3 × Q10 / 4-year combined / 悲観派 N=6,422 vs 楽観派 N=7,168 /  $\chi^2$   $p < 10^{-8}$

## 10 — KEY FINDINGS

### 4年間で示した、10の確かな声。

分析から導かれた、統計的に裏付けされた主要な発見をまとめる。

#	発見
01	「戦争・紛争停止」を最重要とする若者が +21pt 急増 (41.9% → 63.0%)
02	「戦争は減ってきた」と感じる若者が -15pt 急減 (37.1% → 21.9%)
03	「世界は過去より平和でない」と感じる若者が +8.7pt 増加

#	発見
04	「生涯で完全な平和」への希望は2023年ピーク後に急落(34.8% → 24.6%)
05	世界の平和度スコア(Q4)は年により有意に変動(46.3% — 48.8%)
06	<b>対話頻度が高い若者ほど、平和行動が多い(1.5倍)</b>
07	「自分で平和プロジェクトを起こす」意欲が+5.4pt増加(33.6% → 39.0%)
08	「平和運動に参加する」意欲が+4.7pt増加(42.1% → 46.8%)
09	<b>「発信機会」「仲間」を求める若者は、自らプロジェクトを起こす確率が約1.85倍</b>
10	地域差: 米州・中東・オセアニアは悲観傾向、アフリカは未来に最も楽観(Yes 42.1%)

## 11 — WHAT THE DATA TELLS US

### 調査が浮かびあがらせた、 若者が必要としている5つの場。

4年間・173カ国・地域・16,439人のデータを統合すると、若者が平和に向かって動き出すために何が必要かが、具体的な数字として見えてくる。それは5つの共通したテーマとして浮かび上がる。

## 01

### THEME 01 「対話の場」 — 話すことが、動くことへつながる

本調査で最も明確に示されたのは、**平和について日常的に話している若者ほど、実際の行動が多い**という傾向だ。日常的に平和を語る若者は、ほとんど話さない若者と比べて約**1.5倍多く**平和のための行動に取り組んでいます (Spearman  $r = 0.135$ ,  $p < 10^{-67}$ )。「話す」という行為が、意識を行動に変える最初のステップになっている。

DATA —  $Q10 \times Q11 / r = 0.135 / p < 10^{-67} / n = 16,439$

## 02

### THEME 02 「知る場」 — 世界を理解したいという切実な問い

「戦争・紛争を止めること」を最重要課題と答える若者は、2021年の41.9%から2024年の63.0%へ+21pt増加した。同じ時期、「戦争が減った」と感じる若者は-15pt減少している。若者は世界の現実と向き合い、**理解したい・考えたい**という意欲を強めている。戦争・紛争・外交・人権を自分の言葉で考えるための学びの場が、強く求められている。

DATA — Q7 「No wars」 : 41.9 → 63.0% (+21.1pt) /  $\chi^2 = 360.8 / p < 10^{-77}$

## 03

### THEME 03 「尊重の場」 — 違いを認め合う経験の積み重ね

「差別・人権抑圧の解消」は4年通じて最重要課題のトップ2に入り続けており(47-54%)、アフリカ・米州・アジアいずれの地域でも高位で安定している。回答者の70%が女性であることも、ジェンダー平等への関心の高さを示している。若者は、**異なる背景を持つ人と対話し、互いを尊重する経験**を必要としている。

DATA — Q7 「No discrimination」 : 50.2% (4-year mean) / 4年 Top2 安定

## 04

### THEME 04 「実践の場」 — 自分で動く経験が、次の行動を生む

「自分で平和プロジェクトを起こしたい」と答える若者は2021年の33.6%から2024年には39.0%へと増加した。さらに、「**声を発信できる場**」や「**仲間とのつながり**」を必要とする若者ほど、プロジェクトへの意欲が顕著に高くなっている。小さな実践から始め、自分の力で動く経験が、次の行動への自信を育てる。

DATA — Q11 「Start project」 : 33.6 → 39.0% /  $\chi^2 = 50.6 / p < 10^{-10}$

## 05

### THEME 05 「希望の場」 — 絶望ではなく、平和を描き続けるために

「自分が生きている間に世界は完全に平和になる」と答える若者は2023年の34.8%から2024年には24.6%へと急落した。一方で「心の平和」を最も大切なものとして挙げる若者が常に21-27%存在し、世界の騒りの中でも内なる平和を求める声は変わりません。悲観が広がる時代だからこそ、**希望を持ち続け、平和を描く力**を育てる場が必要だ。

DATA — Q5 Yes: 34.8% → 24.6% (2024急落) / Q2 「Peace of mind」 : 21-27%

## 五井平和財団は、この調査を 25年の活動の土台に置いている。

本調査は、若者の声を聞き続けてきた五井平和財団が、その活動の根拠として蓄積してきた一次データです。173カ国・地域 16,439人の声が示すものは、財団が長年大切にしてきた「対話・つながり・発信の場をつくる」という活動の方向性と、一致しています。

### 調査が裏付ける、3つの事実

#### FINDING 01

##### 世界 173カ国・地域の若者が、同じ問いを抱えている

アジア・アフリカ・米州・欧州・中東——地域を超えて、若者は「戦争のない世界」「差別のない社会」「対話の場」を求めています。平和への問いは、国境を越えた**人類共通の問い**であることが数字で示された。

#### FINDING 02

##### 「話すこと」が「動くこと」への**最初の一步**になる

平和について日常的に話している若者は、そうでない若者より約**1.5倍**多くの平和行動に取り組んでいます。これは偶然ではなく、統計的に確かめられた傾向だ。**対話の場をつくる**ことが、**行動する人を増やす**ことに直結する。

#### FINDING 03

##### 若者が求めているのは、**つながり・学び・発信の機会**

「平和に貢献するために何が必要か」への答えのトップ3は、教育・学びの場(77%)、声を発信するチャンス(69%)、同じ思いの仲間とのつながり(69%)です。**金銭的支援(53%)よりも、関係性と機会**が求められている。

#### — 五井平和財団について —

五井平和財団は1992年の設立以来、「世界人類が平和でありますように」という願いのもと、若者が平和を自分の言葉で考え、語り、つながり、行動できる場をつくり続けてきました。国際ユース作文コンテストには30万人以上・190カ国の若者が参加。Peace Voice・Peace Café・Peace

Journey など、対話と出会いの場を世界規模で提供しています。本調査はその参加者の声を 4 年にわたって継続的に記録したものです。

### データが示すこと

若者は悲観しながらも、無関心ではありません。世界が騒りを増す中でも、**平和について話す頻度は上昇し、自らプロジェクトを起こしたいという意欲も高まっています**。「悲観は絶望ではなく、行動への入口である」 — このデータはそう語っている。

### 財団 Web サイト

<https://www.goipeace.or.jp/>

## 調査から見えた、4 つの数字

# 173

### カ国・地域の若者の声

4 年間で集まった 16,439 人の回答。アジア・アフリカ・米州・欧州・中東をカバー。

# 1.5倍

### 対話する若者の行動量

日常的に平和について話す若者は、話さない若者より約 1.5 倍多く平和のために行動している。

# 77%

### 教育・学びの場を必要とする

若者が最も必要とするのは金銭的支援ではなく、学び・仲間・発信の機会。

# 39%

### 自分でプロジェクトを起こしたい

2024 年、約 4 割の若者が自ら平和のプロジェクトを起こす意欲を示した。2021 年比 +5.4pt。

### お問い合わせは、こちらから

TEL: 03-3265-2071 (10:00~17:00 土日祝日を除く)

Eメール: [info@goipeace.or.jp](mailto:info@goipeace.or.jp)

公益財団法人 五井平和財団「平和意識アンケート」事務局